



グリーンポトスニュース

76号：2003年12月

街頭を吹き抜ける風が、冷たくなり、冬将軍も、もうすぐそこまで、来ているようです。今月は、インフルエンザの話題で、『インフルエンザ脳症』です。

インフルエンザ脳症

毎冬、インフルエンザは猛威を振るい、高熱でうなされる方も多いのではないのでしょうか。インフルエンザに罹ってしまうと、3~4日間は、39~40度の高熱に苦しめられます。しかし、インフルエンザの本当の怖さは、その合併症にあります。体力のない高齢者がインフルエンザに感染すると、肺炎の危険性が高くなります。肺炎になると入院治療が必要になりますし、最悪の場合、死に至ることもあります。毎年、新聞紙上を賑わしているように、老人ホームなどで集団感染をすると、死亡者を多く出すこととなります。

年少者に多い合併症として、神経系の合併症があります。発熱時にみられる痙攣(熱性痙攣)は、よくみられる症状です。一時的な痙攣は、特に心配はありませんが、痙攣が長く続くようであると、問題になってきます。もう一つ、また、最も怖い合併症として、脳症があります。インフルエンザ脳症とも言われ、解熱した後、1週間以内に、頑固な嘔吐出現とともに、「いやにおとなしい」あるいは「無関心さ」などの急性脳症の症状が現れます。その後、治療に抵抗する痙攣が発生し、不幸な場合、死に至ることもあります。最近では、治療の進歩により、致死率は20%前後まで低下しましたが、神経学的な後遺症を残すことも多いです。



予防対策として、最も有効なものは予防接種です。先月号でもお話しましたが、予防接種をした場合、インフルエンザの発症とともに、合併症が防止できます。前述のインフルエンザ脳症の場合、死亡した患児は全員、インフルエンザ予防接種を受けていませんでした。インフルエンザ予防接種をした場合、脳症を起こすことも極めて少なくなり、合併症防止のためにも、予防接種をお勧めします。

インフルエンザの怖さは、高熱より、その合併症です。予防接種をすることにより、合併症が確実に予防できますので、必ず、行うことをお勧めします。